

【学校向け・地域向け】【協力・実践形態：長期・単発】【本会ホームページへの掲載：あり・なし】

拡大写本ボランティア～弱視ってどんなこと～

須田正子

【推進員認定期】 第3期 【所属】 坂戸拡大写本の会・

あったかウェルねっと（ボランティア） 【活動エリア】 坂戸市・埼玉県を中心に

学習対象者	小学生（ 年生） 中学生 高校生 住民 その他（大学生）
内 容	障がい理解（車いす体験、アイマスク体験、当事者と交流、施設体験、その他（弱視） 高齢者理解（高齢者疑似体験、当事者と交流、施設体験、その他（ ） その他の理解（拡大教科書・拡大写本ボランティア・社会貢献）
所用時間	単元時間： 1時間/年、 1回あたりの時数： 90分
ねらい	拡大写本を知る。視覚障害には「弱視（見えにくい）」が多いことを知る。 見えにくさには、さまざまな違いがあることを知り、必要なことを考える。 拡大教科書の制作を通じて、必要とされる支援や仕組みについて考える。 情報の大切さ、ボランティア活動と社会貢献の関係に気づき、将来に活かす。 相手の意見を聞き、必要な事とそうでない事に気づき、助けたり助けられたりしながら、お互いに交流し合うことが大切と気づく。

はじめに

拡大写本とは、文字を読むのが困難な方のために、その人に最も読みやすい文字の大きさと書き写した本のことです。視覚障害に対応するボランティアでは、点訳や音訳は歴史が古くよく知られていますが、拡大写本はあまり知られていません。しかし、実際は「全盲」よりも「弱視」のほうが数倍も多く、また、その症状も千差万別で、個別の対応が必要となります。また、高齢になれば誰もが見えにくい状態となり、誰にとっても必要となるサービスです。

坂戸拡大写本の会では、弱視児（小学生）が使用する教科書を、その生徒が最も読みやすい大きさの文字で書き写したり、パソコンで入力した拡大教科書を制作しています。また、読書障害者（高齢者など）には大きな活字の読みやすい大活字図書を制作しています。

「拡大教科書」は、ボランティア団体等の個人が発行しているもののほか、出版社等の企業や社会福祉法人で製作・発行しているものがあり、文科省・教育委員会・発行者で契約、無償給与されます。

実践内容

K 学園女子大学社会教育学科の児童福祉論の一コマ。年に一度担当。（2002～2009年度）年度により、15～60名。

【準備するもの】

回覧用：坂戸拡大写本の会制作の拡大教科書とその原本、弱視用便利グッズ

体験用：スズランテープ（巾6cm位・長さ80cm位）、白紙、拡大用下敷き、例文、見本

【弱視ってどんなこと】

1．拡大写本の会の活動紹介（ボランティア活動のきっかけと継続、社会参加と自己実現の視点を加味）

2．見えかたのいろいろ（弱視の人はどのようにみえるのだろうか）

弱視の体験：スズランテープを目に当ててプリントの文字を読む。

文字がぼやける 濃淡ハッキリ、大きく書く、近づく、太い・細い線

文字が重なる 太い・細い線

光がまぶしい 黒地に白抜き、色つきの用紙

視野狭窄の体験：細い筒を覗いて遠くを見る。

視野の欠損・狭窄 範囲、行送り、小さい文字のほうが見える。

3．拡大教科書の制作方法と必要性の説明

4．拡大文字を書いてみる

1年生国語教科書「くじらぐも」の1ページを使って、拡大文字にレイアウト

レイアウトどおりに、下敷きに合わせて大きい文字を書く、校正をする

5．感想および質疑応答

ここがポイント！

弱視の見え方は、一人一人違う。

暮らしの工夫や、道具をつかうことで、見えにくさを補っている。

拡大教科書制作のポイントを伝える

- ・文字や図表の間違いが無いよう正確に書く。レイアウトは見やすくなるよう工夫する。
- ・見え方の違いにより、文字の大きさ、書体など決めるので、制作前の打ち合わせが大切。
- ・児童、保護者、担任教員と意見交換をし、授業以外の学校生活の様子もヒアリング。
- ・対象児童が社会生活に対応できるよう、配慮する。（ルーペなど道具も併用してもらう。）
- ・コピー会社による社会貢献の紹介（多量のカラーコピーが無償で出来る）
- ・法律により拡大教科書の無償供与が実現したことの紹介（文部科学省、教育委員会、児童保護者・教員・ボランティアの連携）

成果と課題

拡大写本・拡大教科書を知ってもらう事が出来た。

視覚障がいには、全盲より弱視（見えにくい）のほうが多く、暮らしの中でいろいろな工夫があることを知ってもらうことが出来た。

相手の意見を聞き、必要なことを必要なときに支援することが大事と知ってもらう事が出来た。

様々なユニバーサルデザインに気づき、誰にとっても暮らしやすいまちについて考える機会となった。

教員だけでは伝えられない地域活動や、いきいき活動している様子と元気が学生に伝わった。

卒業後の社会貢献の可能性を伝えることが出来た。

時間数が少なく、拡大写本制作は、体験程度となった。